

新潟県長岡地域振興局長賞

税金と子ども

新潟大学教育学部附属長岡中学校

三年 大竹 若葉

先日、ネットニュースでとある記事を見つけた。それは「教育の公的支出の割合がOECD加盟国で最下位だった」というものだった。日本では年間、教育に約五兆五千億円もの税金を使っている」と知り、想像もできないような額の大きさにとても驚かされたため、それでも支出の割合が少ないというのは果たしてどのようなことなのかと衝撃を受けたのを覚えている。

さて、日本における税金の使用用途は、個人や企業の力ではできない、公共サービスや社会資本の整備といったものがある。その中でも今回注目していきたいのは、「子どものために使われる税金について」だ。

租税教室では、「税金を公平・平等に負担するために、模索している」と話を聞いたが、私たち子どもに馴染み深いのは「消費税」くらいで、やはり税金の大半を納めているのは大人たちであると感じた。しかし、新潟県の当初予算の概要を見た際に目に留まったのは、対象が子どもである事業たちだった。私は、税金を公平・平等に負担するために模索しているのであれば、諸事情で税金による補助を必要としている人を除いてできる

だけ公平・平等に税金による行政サービスを受けるべきなのではないか、と感じていた。学校という場で当たり前のように仲間たちと教育を受けることができる。当たり前のように安全で質の高い医療を受けることができる。このようなことができない他国の子どもたちを見てみると、いかに日本が満ちたりているのかと気づかされた。だから私は教育への公的支出が少ないと批判するような記事の内容にあまり納得できなかった。

しかし、このような考えが変わったことがあった。それは、今まで捻挫や骨折などの怪我や病気などの度にお世話になってきた、子どもの医療助成制度が少子化対策のためになると知った時だった。そこで初めて私は、「このように子どものために使われる税金は、大人の人からすればいわば、これからの将来を担う世代への投資のようなものかもしれない」と、その存在意義をつかむことができた。また、冒頭の記事の内容に納得し、理解することができた。

その存在意義が理解できたことで、税金に対して感謝の気持ちが芽生えたとし、税金を使っていたことのできることものを大切にしようと思うことができた。

納税を自らすすんでする人は少ないと思う。しかし、これからは、税金の無限の可能性や将来への可能性を信じて前向きな気持ちで納税できるような大人になっていきたい。